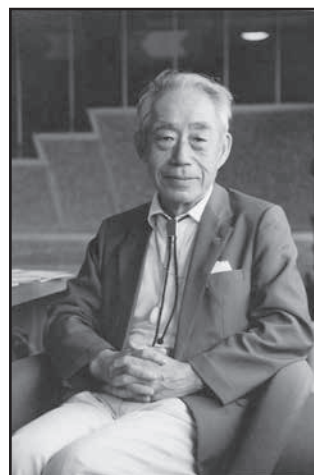


## 藤永太一郎先生を悼んで

堀 智 孝\*

去る6月4日、藤永太一郎先生が逝去されました。95歳でいらっしゃいました。本海洋化学研究所研究員の皆様並びに(財)海洋化学研究所に関わって下さっている皆様に謹んでお知らせ申し上げます。

石橋雅義先生が海洋化学研究所の始祖であるとするれば、藤永太一郎先生は中興の祖にあたると思います。と申しましても、研究所が途中で衰退したというのではなく、多くの点でその姿を変えました。それまでと同様に海洋に関する化学的研究を推進することに加えて、国内外で進展する海洋研究を支援し、関連する学会・講演会・シンポジウムを開催して研究者間の交流を密にし、併せて、研究所の活動実態を出版物を通して公表するとともに、代表的な研究を海洋化学学術賞



(石橋賞)でもって顕彰することになったのです。このあたりの事情を理事長であった藤永先生は本誌の創刊号(1986年4月)の中で、次のように記しておられます。“…石橋雅義先生は本研究所を京都大学理学部化学科に設置され、我々研究室の職員は兼務で本研究所の研究嘱託でありました。(中略)本務の研究所員は一名もなく、予算決算もゼロのまま長年経過してきました。石橋雅義先生のご逝去に伴い、京都大学農学部名誉教授近藤金助先生が理事長を継がれましたが、その後もこの運営方針は堅持されました。一方筆者(藤永太一郎)も京都大学理学部分析化学講座を継承するに当たって、分析化学の研究領域こそ恩師石橋雅義先生のそれと多少異なることになりましたが、海洋化学の研究はむしろ先生の兄弟弟子と共にそのまま引き継ぐことになりました。(中略)ついで、近藤金助先生も逝去され、非才の筆者が理事長を継ぐことになりましたが、丁度この時点から四周の情勢が急変して参りました。先ず、文部省からは国立大学への特に経理面における依存度を減らし、研究所自体の活性化をはかるよう、との指示を受けました。…”

少し時間を戻して、1941年春、石橋教授を訪ねた藤永卒論生は事前に漏れ聞いていた研究課題「噴霧法による発光分光分析装置を組み立てて海水中のセシウムを定量する」とは打って変わって、「ポーラログラフ装置を完成させてアルカリ金属元素を分離定量する」に取り組むことになったのです。同年秋に京都帝大助手、それから4年間の兵役を挟んで1946年講師に昇任された藤永先生は、卒業研究を皮切りに新しい形式の示差ポーラログラフ法と電流規制ポーラログラフを矢継ぎ早に創始され、その成果を世界に向けて問うておられます。ややあつての1960年藤永教授の誕生、

\*京都大学特任教授、一般財団法人海洋化学研究所理事

ここでは新たにカラム電極電解法とイオン電極ボルタンメトリーの創始が加わりました。その後22年経って教授退任が近づいた折には、これら電気化学分析の成果の全体が英王立協会での招待講演(1981年)、学士院賞授与(1986年)、ロバートボイルメダル授与(1993年)という形になって、斯界の研究者から大きな賞賛と栄誉が贈られることになりました。それぞれの顕彰が成果のどの点を指すのかは違っていても、藤永先生の研究成果にはどれもみな端麗さがあって、専門を異にするものにとっても研究の核心がすぐに飲み込めるようにできていました。常々ポアンカレの名句「科学者は真実を追究することに愉悅を感じるが故に研究するのであり、真実が美しいが故に愉悅を感じるのである」を傍に置いておられたためだろうと思います。とりわけ、ボルタンメトリー研究に通底しているのは、電位・電流・時間の三要素が藤永先生独特の思考法と絶妙に融合していることだと感じました。

藤永先生からは、われわれ後進に向けて石橋先生の海洋に関するご研究の教授がありました。海洋微量成分定量法開発の工夫、海水中微量成分の自然濃度から導かれた元素賦存則と海洋年齢の推定などを、最も適確な表現と方法によって教わりましたので、いまのわれわれは周りの人に海洋化学の講義ができるくらいにまで身につけています。さらに進んで、海洋の研究がなぜ必要なのか、海水とは何か、今後に残されている大事な課題は何か、海洋研究が陸水の研究をどのように刺激しているのか、資源やエネルギー問題の解決法を探るための海洋研究の大事さ、人類の生存や将来に関する問題など、常人では手の付けようのない難問が実は海洋研究の延長線上にあるんだという教えはいつになっても色あせない話題となって記憶に残っています。こういったご貢献が単に京都という地域にとどまらず全国の大勢の人々に知られることとなり、京都府文化賞の受賞と勲二等旭日重光章の叙位に繋がっています。

財団法人海洋化学研究所は、設立当初の資金を(株)兼松商店・兼松江商から、また財団中興の時期には、新規事業実現への資金を(株)紀本電子、(株)名村造船、(株)ハーモニック・ドライブからそれぞれに受けたと教わっています。藤永太郎理事長の海洋化学研究所の運営理念は、故木田英理事長、伊藤光昌理事長を経て、宗林由樹代表理事に継承されています。並行して、藤永太郎研究所長の海洋研究への情熱は左右田健次、桑本融両研究所長を経て中西正己現所長に一層強さをまして受け継がれています。今後も海洋化学研究所は海洋化学研究所の中核的機能を果たしながら、海水の様態や動態の議論にとどまらず、海洋研究を通して宇宙のなかに何を覗いて、自然科学者として何を考えればいいのかを日々求めて行くこととなります。長い間にわたり、財団と研究所の正路をお示し下さり有り難うございました。安らかにお眠り下さい。

財団法人海洋化学研究所は、設立当初の資金を(株)兼松商店・兼松江商から、また財団中興の時期には、新規事業実現への資金を(株)紀本電子、(株)名村造船、(株)ハーモニック・ドライブからそれぞれに受けたと教わっています。藤永太郎理事長の海洋化学研究所の運営理念は、故木田英理事長、伊藤光昌理事長を経て、宗林由樹代表理事に継承されています。並行して、藤永太郎研究所長の海洋研究への情熱は左右田健次、桑本融両研究所長を経て中西正己現所長に一層強さをまして受け継がれています。今後も海洋化学研究所は海洋化学研究所の中核的機能を果たしながら、海水の様態や動態の議論にとどまらず、海洋研究を通して宇宙のなかに何を覗いて、自然科学者として何を考えればいいのかを日々求めて行くこととなります。長い間にわたり、財団と研究所の正路をお示し下さり有り難うございました。安らかにお眠り下さい。

